

目次

天理大学附属天理図書館蔵『於雲沢蒙求聞書』	柳田 征司	一
サ変動詞未然形「さ」の成立過程	山田 潔	三五
副詞「かま(構)ひて」は「かま(構)へて」の音転か	坂詰 力治	四〇
狂言の言葉「おふふ」について	鈴木 博	五〇
和泉流狂言台本雲形本と古典文庫本の本文比較	小林 賢次	五三
——せりふに関して——		
狂言の心話文	阿部 八郎	五七
「ぶた」の誕生	鈴木 英夫	一三三
国語史的注釈試論『大かこうさまぐんき』		
〈天正十九年鷹狩り・関白秀次聚楽渡御〉	小林 千草	一三五
伝書としての女中ことば集	松井 利彦	一四七

へら抜き言葉の私見……………杉本つとむ……………一八五

——古代語から近代語への脱皮——

武士の公用社交用語……………田中 章夫……………二〇三

「しか」のない文……………中野 伸彦……………二二三

『二之富當眼』の仮名遣い……………矢野 準……………二二三

——「は・わ」「お・ほ・を」を中心に——

近世後期上方語資料としての『鳩翁道話』について……………山口 豊……………二四一

近世江戸語におけるラシイについて……………岡部 嘉幸……………二五五

江戸・明治初期における可能を表す「得」の用法……………斎藤 文俊……………二七五

英学会話書『英和日用句集』の人称代名詞……………常盤 智子……………二九一

——『南山俗語考』・『英和日用句集(初版)』・『同(三版)』の比較から——

『英和通信』初篇諸本について……………大久保恵子……………三〇九

江戸語から東京語に至る断定辞としての終助詞「よ」

の変遷——断定辞としての終助詞「さ」との比較から——……………長崎 靖子……………三二九

明治10～11年の新聞のことば……………進藤 咲子……………三五五

——「郵便報知新聞」を資料として——

汎共通語……………森岡 健二……………三七三

全国共通語「おる」の機能とその起源……………金水 敏……………三九三

鉄道駅名の形成と変化……………鏡味 明克……………四一三

「かけめぐる」ゆめ……………岩下 裕一……………四三九

格助詞ガ・ノの用法から見た俳諧表現史の構想……………神戸 和昭……………四四五

——芭蕉・蕪村・一茶の発句をめぐって——

四母音「三宅島坪田方言」事実の検証……………山口 幸洋……………四六五

論説文の口語化……………宮島 達夫……………五二二

執筆者略歴…………………………五二三

- 五 底本において、漢字にもともと振り仮名のある場合には、へんで示す。
 - 六 仮名遣いは、底本のままとし、今日の常識と大きく異なる場合には、「私注」において言及を行なう。
 - 七 濁点は、適宜新たに伏したが、一々断らず、問題になりそうなものについてののみ、「私注」において言及を行なう。
 - 八 反復記号の部分に漢字を当てる場合、漢字一字分の反復については現在の慣例に従い「々」を使う。
 - 九 読みやすさを考慮して、新たに句読点を加える。改行や意図のある空白部については、できるだけ、底本である太田牛一自筆本のリズムを伝えるように努める。
 - 十 誤字・宛字・衍字などは、(マ、)と一旦示し、「私注」において言及を行なう。
- 「私注」については、国語史的観点からの言及や文章心理学的な分析を最優先し、同じく太田牛一の著作になる『信長記』(岡山大学付属図書館池田文庫蔵)・『信長公記』(陽明文庫蔵)などとの語彙的・表現的類似にも留意してゆきたい。また、記された内容一つ一つを「情報」と見て、個人における「情報」の文章化と表現の実態を追うという視野をも有するものである。

なお、歴史上の人物については、『国史大辞典』(吉川弘文館)・『戦国人名事典』(新人物往来社)などを、地名については『日本歴史地名大系』(平凡社)を参照することにして、それぞれ、印を付した略号を用いる。

釈文「本文七」

天正十九辛酉、十月はじめより尾州、三州御鷹つかはされ、十二月まで三か月、御鷹余多にて御鳥

数大小三千に及ぶ也。

おびた、しき物数、往古より承り及ばず。十二月十六日、大津の城、

新庄駿河、所にて御用意なされ、思く様くひようげたる御出立ち、御鷹匠衆、百五十余人、

薨を並べ、四十八鷹の事、申に及ばず、諸鳥を御据ゑなされ、道は一筋に候へども、中をあけて、

左右に御鳥飼の御餌から一様に結構に立出せ、持たせられ、中筋は、御警固の御衆也。

関白秀吉公、御乗物に召され、これも御鷹据ゑさせられ、大津より京へ三里ひきつゞき、金銀を散

りばめ、光輝き、結構興を催す有様、筆にもことばにも申尽しがたし。

内裏の南より西へ回り、聚楽へ直に御通り候也。これによつて、御築地の上に、皇居を構へ、月卿

雲客、公卿天上人、異香あたりをはらつて、四方に薫じ、帝も御覧有て、面白く思し召し、御

歡喜斜ならず、見物おびた、しき次第也。

私注一 鳥数・物数・ひようげたる・四十八鷹

天正十九年辛卯(二五九二)十月初めより十二月まで三ヶ月間、豊臣秀吉は、尾州(尾張国)や三州(三河国)で、鷹狩りの旅を挙行した。

その鷹狩りに使った鷹の数が多く、「御とりかず」——鷹の捕獲した獲物(必ずしも鳥には限らず、小動物を含む)